

平成十六年十一月一日発行 第十四卷第十二号 通巻第一六三号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成16年12月号

岡井省二創刊



近江八幡

高橋将夫

白河に置いてきたりし秋思かな
氷頭膾それだけ聞けば充分よ
どの色になろうか五色唐辛子
秋の燈に浮かび上がりし梵字かな

牛蒯引き無理することはなかりけり
オルガンを一人で聞いてゐる案山子
ぐるりには誰もゐないよばつたんこ
蟋蟀と気持の通じあふ夕べ
鉄砲町魚屋町も秋天下
鳥渡る白雲館の鉄扉かな
面影の近江八幡水澄めり

命 惜 し

島 す が 子

ながれゆく雲に糸瓜の曲りぐせ
おしろいのしぼみはじめの頭痛かな
浅間嶺も見えなくなりし虫しぐれ
曼珠沙華声なき声のあふるるや
まつわりてうす墨いろの秋の蝶
命惜しいとほしほしとおしいつく
買物の帰りは消えて秋の虹
竹林の幹にぶつかり曼珠沙華
川波を擦つて帰燕になりにけり
亡き夫や日日朝顔の小振がち

特別作品

銀漢やゴスペル遠くながれをり
虫鳴いてゐるのみの闇やはらかき
独り身のわが家住ひのつづれさせ
わずかなる岩間に咲いて螢草
川中を斜めななめに石たたき
声だけを残して霧の別れかな
ふりかへりても揺れてをり吾亦紅
鶏頭に祈のことば眩けり
濃竜胆瘦身ゆえの帯きつく
餓死させし象の話や冷まじき

槐安集

市場基巳

いちにちを水みてありぬ盆燈籠
水に香のぬけきつて秋はじめなり
水振舞けふゆきあてし寺ひとつ
通り雨過ぐる間も虫鳴きしぐれ
雨は秋のおもむき深め降りつづく

水野恒彦

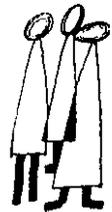
子の眼しきつめ敷きつめ花野かな
何百の甕伏せてある秋の暮
竹林に入りしままなり秋扇
うつしみの漂うてゐる稲田かな
月明に水の入つて行きし穴

石脇みはる

ほこほこの花野の中のもぐらみち
桃吹くや奈落の底は知らざりし
草山に弦月かかる八雲の忌
母の辺に古語辞典繰る良夜かな
沙羅の木の肌はだえまだらに冷やかに

竹内悦子

先生の居るがに秋の影法師
かくれんぼ音なく落つる桐一葉
ぎんなんや母の乳房垂れてをる
眠たくて芋茎の釜を茹でこぼす
不知火やポケットにある燐寸箱



木下野生

秋の蛇あたまのはうが見えてをり
告別の式終りけりいわし雲
切株のそばに切株秋の暮
棒切れの浸つてをりぬ秋の水
ありあはせなり鈴虫を入れる籠

中島陽華

木菟のこゑはシャネルの五番かな
知らぬ間に子に盗まれし衣被
あまんじやく仁王が下の貴船菊
声に出て奥の細道鱈のへそ
ともし火や手にしかとある冬瓜種

延広禎一

神殿にオリーブの実と洋弓と
杵掛の掌に鬼の子の垂れて来し
月光に阿蘭陀味噌を練つてをる
へらへらへ鯨銚立ちの穴まどひ
蛇穴に胎蔵界の明るさよ

栗栖恵通子

黒髪の先不知火のことごとく
間引菜や疹いてゐたる脛腓
良に水の音ある良夜かな
繩梯子の端ゆれてをる月兎かな
かりがねや魂魄あをくありにけり

加藤みき

新松子胸中に鳴る鈴をもつ
狐日和木賊の花の咲きにける
馬追の髭の彼方の星空よ
状袋の茴香の実の音なりき
弱法師の姿の雲や秋収め

雨村敏子

榭の森に入り九月の木霊かな
鬼の子の睡りにつきし桜の木
鯛雲 天文台も貝塚も
重陽の波かぶりたる孔雀貝
登高や淡海のいろに昏れにける

大島翠木

曼荼羅に雁の渡りとなりにけり
月光に枸杞の実十粒程噛んで
耳にまだ津軽じよんがら鱗雲
唐辛子軒に水上勉の訃
鳥さやさや重陽の日の竹林に



槐市集

片岡静子

結納の口上つつかえ秋暑し
伊達衿を二枚重ねに初紅葉
口数の多き父なり松茸椀
お互いにメガネでありし秋の天
初めての着物広げし稲穂かな

加藤富美子

のぼり行く玉虫とどめ風化佛
疎水路の石が足引く居待月
菩提子や稚魚走るたび水のゆれ
箸二本ゆば味噌合えも栗飯も
しづけさや足失ひしきりぎりす

金澤明子

鉄門扉投げ出されをる葉月潮
枯梅の根こそぎ天に向きにける
赤と黄の獅子舞ひにける野分かな
虫しぐれ夫の筆遅々資産表
パラリンの轍二夕筋蓼の花

北嶋美都里

溝飛んで石に休めり秋ざくら
晩秋の波打つ風の容かな
紅芙蓉既に暮れたる麓かな
曼珠沙華煙消えゆく生駒山
コスモスの高さ人の動きをり



槐集

高橋将夫選

ざくろの実はぜて真昼の蟹満寺 枚方

谷村 幸子

烈日を煮つめし色に鶏頭花 岡崎

近藤 喜子

秋海棠うみたて卵てのひらに

人に尾の名残りありけり秋の風

一枚の戸籍膳本秋彼岸

大黒の闇の芯へと竈馬かな

真顔にて瓢の笛ふく翁かな

秋の夜や右の耳より外に出づる

産土に菩提子拾ふ赤い靴

夜空より砂金こぼるる芒原

赤米の花が咲いたよ大田螺 香川

黒田 咲子

濡れてゆく石のはしより今朝の秋 枚方

中野 京子

秋雨や指しなやかな檻の猿

空よりも海のひろさよ秋入り日

雁瘡の山伏とその女弟子

研なき畦に佇ちをり曼珠沙華

竜神が白ペンキ塗る毒茸

満月の更地になつてをりにけり

十五夜の雨ふる紫竹囲ひかな

風鎮をかけしばかりや新松子

薄墨のにじむ白紙鳥帰る佳世子 枚方

谷口佳世子

はるかなる音葦原の權なりし 岡崎

岩月優美子

コスモスの中より僧のあらはれし

牧人の影の一つに秋思あり

父の山青栗落ちてをりにけり

ででむしの殻転びをり芋嵐

メトロノーム止まり曼珠沙華まつ赤

秋涛や夜半の星屑散らしをり

颱風の目の中にゐる翁かな

毬栗の落つ引力の音なりき

銀河往来 高橋将夫

Ⅱ内の目、外の目Ⅱ

◇結社誌の一部では、交流誌の各主宰の作品から一句を抄出して掲載している。それらの中から私の一句を参考に集めてみた。

(注) *は『梶』6月号、他は7月号の作品

菟坊主大胆にして細心に * (『斧』抄出・小島千架子)

春風や象牙犀角牛の角 * (『黄鳥』抄出・小西領南)

いま吸ひし花の匂ひを吐きにけり (『峠』)

(『菜の花』抄出・伊藤政美)

(『カリヨン』抄出・市村究一郎)

(『まほろば』抄出・浅利康衛)

風よ風上がれ上がれと引きにけり (『春野』抄出・黛執)

(『貝寄風』抄出・中瀬喜陽)

春日傘ためらひがちに回りたる (『朱雀』抄出・有山八洲彦)

とめられぬ柳絮の行方なりしかな (『氷室』抄出・金久美智子)

(『かたばみ』抄出・森田君子)

(『やぶれ傘』)

花の山ぐるり人間ばかりかな (『築港』抄出・塩川雄)

春の水星の渦より汲んできし (『春月』抄出・戸恒東人)

白南風に乗り呼び出しのアナウンス (『風雪』)

夏の夜の夢は隣の宇宙へと (『往還』抄出・南律子)

(『暖鳥』抄出・編集部)

(『ひこばえ』抄出・嶋豊)

◇『これ(八月号)』(木村敏男主宰)

『俳句遠望』(石山雅之)より

春眠の途中冥府に寄りにつけり 高橋 将夫
冥府は、冥土(冥途)のこと、本来死者の靈魂が、さ迷い行く道である。

余りにも心地よい夢見の眠りに、美しい浄土に近づき垣間見た様な感覚を言われたと思うのだが、まだ浄土やらには入り込まずに、「覗いただけで、大急ぎで戻って来たよ」と言うお話しで、まだまだ人間界に、未練たつぷりのお句と拝見した。

◇『槐集』観照

ざくろの実はぜて真昼の蟹満寺 谷村 幸子
蟹満寺は少女が救った蟹の功德で蛇の害を免れたという謂れのある寺。石榴も「ざくろ」とやさしくなる。

赤米の花が咲いたよ大田螺 黒田 咲子
「赤米」から、なんとなくめでたさを感じさせられる。大田螺がいて、懐かしい田園風景と俳諧の世界が広がる。

颯風の目の中にみる翁かな 谷口佳世子
颯風が通過しただけのことであるが、「颯風の目の中」にいる翁」となると、もはや尋常の翁ではない。

夜空より砂金こぼるる芒原 近藤 喜子
満天の星の瞬きを芒原にこぼれる砂金とみた作者の感性に脱帽。

満月の更地になつてをりにけり 中野 京子
月光のもとにポツカリと空いた空間。以前は大きな屋敷でも建っていたのだろうか。不思議な空間。(以下略)